化粧箱にデンと納まり、金ピカのラベルで、「一級酒様」と喜んで買ったのが、前記の持ち去られた地元の安酒かと疑うのは、私のひがみでしょうか。

戦前の酒は、開封後二週間もすればボッボッ変質していたのに、現在のは二、三か月は平気です。これは米へ澱粉）分より各種化学製品（薬品分）が多い証拠です。

ここ一、二年日本酒の消費は頭打ちで、ビールの伸びが目立ち、次が焼酎、ウイスキーも少し伸びの由であります。

いささか左党の筆者、愚考するに、日本酒の伸びなやみは、一級酒、二級酒制度となり、アルコール分十六度あれば一級酒でございと、値段ばかり高く、銘柄々々独特の持味はなく、進歩した薬品を使うせいか、みんな同じ味、あの日本酒独特の味がないからでしょう。

聞くところによれば、佐伯地方の酒は、地元消費の外、宮崎県北部で大量に消費されており、好評の由であります。（資料ー業界紙・百科辞典・古老談等による）

前記稿了後、次の酒の販売価格表を発見しましたので、追記して皆さんのご参考に供します。酒一升の値段で、弥生町床木、一ノ瀬部落の「お日待講控帳」から拾いあげたものです。（明治三十四年から昭和四十三年までの記録に、二十か所書かれている、紙面の関係で一部省略した。ー係ー）

明治三十四年	二十八銭	昭和十五年	一円八十五銭
〃 四十一年	四十銭	〃 十九年	三円三十五銭
大正 二年	五十五銭	〃 二十二年	三十円
〃 七年	六十銭	〃 二十八年	五百三十円
〃 十二年	一円	〃 三十年	四百八十五円
昭和十三年	一円十銭	〃 四十三年	五百五十円

（おわり）

買書

ふる里の地名あれこれ

―最近誰かと話を交した中から―　（羽柴）

小半（おながらー本豆村）　ながらは長良の文字をあて、蛇に関係があると何かで見た。こなからなら小半の字をあて二合半のことだそうな。且ては寒村であった小半の地名は、こなからから来たのではないか。

漆島（ふかしまー蒲江町）　島のまわりの海にふかが多いので鰭島というとばかり思っていたら、いもそうでなくまわりの海が深いからだということが耳に入った。漁師の生活体験からきた呼び方。

市木（いちぎーー弥生町）　今の町役場、川沿いにあった村名、川向のとちわら（栃原）村と共に今はなくなった村名。お地蔵さんで有名な市木はどこか　ご教示願いたい。いちぎはくぬぎ（橡）のこと。

白水（しろぎーー番匠鉄橋の下手、しろぎの鼻という）　蒲江ではくろがねもちの幹が白いのでしろぎと呼ぶ。してみると昔、あのあたりにくろがねもちの巨大なのがあったのか。

柚の原（ゆのはるーー直川村仁田原）　柚（ゆず）の木が生えていた原（はる）であったからだろう。ゆずと呼ばんでゆのすといっている。柚の酢だからゆのす。

竹野浦（たけのうらーー米水津村、蒲江町にある）　海岸近くに広大な竹林があったからであろう。

振寄（かじよせーー鶴見町）　大入島の日向泊ほど神武神話は濃厚ではないが、艪のかじを寄せるところで、この名が生まれたか。

栂牟礼（とがむれーー佐伯市と弥生町の境）　中世の古城址、牟礼は朝鮮語からきたもので山の意、栂（とが）の木が生い茂っていたのであろう。

戸穴（ひあなーー佐伯市八幡地区）　同所字戸の山裏にある洞穴からきた呼び名か。戸（ひ）はへと呼び人家、住居を指す。その洞戸は人が住んでいたものであろう。

名護屋（なごやーー蒲江町）　魚小屋を岬につくっていたことから。